



👤 我々は子供と大人の社会の架け橋になっているだろうか？

👤 子育てママのネイティブ自粛生活から学ぶことは何か？

👤 失敗を許容できる社会や組織をどうデザインすべきか？

## EXTREME INTERVIEW

保育士はファシリテーター

子どもを通すと見えてくる社会やコミュニティのみらい

# 小竹 めぐみ氏 小笠原 舞氏

子どもみらい探求社・保育士起業家

親子で通う、オンライン保育サービス「おやこ保育園」やお子さんを通じたまちづくり活動などを行う子どもみらい探求社を経営するお二人。東京生まれの小竹さんは6年前に京都に移住。



本町エスコラという現代版の長屋コミュニティに住んでいる。隣の伏見区にあるもう一つの町家のシェアハウスにも拠点があり2拠点を行き来して生活をしている。「夫と分担しながら、距離感をすごく大事に見つめながら、自分らしさも大事にした暮らしにチャレンジ中というような人間です。」と語る。5歳のお嬢さんがいる。小笠原さんは埼玉県川口から2016年の春に神戸に移住し、現在は長田区に在住。「うちの町は多文化共生をうたっている町。高齢者や外国籍の方も多くいて、様々なバックグラウンドを持つ人たちが混じり合って暮らしています。そういう環境で子育てしたいなと思ったのと、自分もいるのが心地よかったのでこの暮らしを選びました。」と語る。3歳の息子と柴犬と暮らす。

今回は「子ども」をキーワードにコロナ禍におけるお二人の価値観についてお話を伺った。

## 子供の世界と大人の社会というものの架け橋になりたい

子どもみらい探求社は読んで字のごとくですね、「子供の世界」と「大人の社会」というものの架け橋になりたいなと思って作った会社です。元々どちらも保育士の経験があるのでそれを活かし、家族・子供・子育てに関して、企業や行政の方と色々な角度でコラボレーション事業を展開しています。建築業界の皆様とも一緒にした際には、フィールドリサーチや場所を作るお手伝いをさせていただきました。地域作りにおいても、家族というキーワードは外せません。いろいろな文脈から、「子供たちにとって本当に良い未来」というものをつくっていくのが私達です。また、私達が運営する「おやこ保育園」は口コミで話題に。ありがたいことに書籍化もしましたし、常設園もでき、開設を監修をさせていただくなど、様々な展開が見られています。



## オンラインサービスへの進出はコロナによって実現した

去年クラウドファンディングをして約400万円を集め、対面式でやっていたサービスを完全にオンラインに切り替えました。すると逆に今まで出会えなかった地方の方々にアクセスできるように。お仕事自体の数は減りましたが、逆にコロナだったことによって起こったメリットもありました。



## マスクしない相手=家族 コミュニティ体感の動線が弱い

じつは0歳のママってネイティブ自粛生活なんですよ。おやこ保育園で聞こえてきたママたちの悩みなどの声は、コロナの前後でそんなに変化もないんですよ。むしろコロナによって、その大変さに家族が気づき、周りが聞く耳を持ってくれ始めた、という感じがありました。孤立する親が増える今、近隣の人をはじめ、周りの人に頼る力も必要だと思っています。しかし、頼りたいと思いつつも頼り方がわからない人たちも多にいる昨今。頭ではわかっていても、実際に頼るまでの動線がすごく弱い気がしているのです。その矛盾との戦いがすごくあるなと思っています。



## 子供は失敗すると 心のポケットに学びが多く入る

子供の失敗を叱るか、失敗しないように準備するかで悩む親御さんは多いのですが、失敗させてあげることで得られるものは多くあります。ただ一方的に人から教えてもらったことってすぐ忘れてしまいますよね。自分が実際に痛い目に会うことで、心のポケットに学びが多く入るんですよ。コミュニティも企業も社会も失敗を許容して「一緒に成長していくスタンス」を持てるようになるといいですね。

HP: <https://kodomo-mirai-tankyu.com/>  
問い合わせ先: [info@kodomo-mirai-tankyu.com](mailto:info@kodomo-mirai-tankyu.com)

🗨 Interview / 2021.11.11 オンライン